



老川美治

新平家物語

第九卷

市文庫の巻

昭和二十七年十二月十五日 印刷
昭和二十七年十二月二十日 發行

定價二八〇圓

新・平家物語 第九卷 御産の巻

著者 吉川英治

發行者 杉山胤太郎

印刷所 東京都新宿區市ヶ谷加賀町
大日本印刷株式會社

發行所 東京都丸ノ内
大阪市中之島
小倉市砂津
朝日新聞社

御産の巻
目次

おん猿樂

大野の火放け

鹿ヶ谷始末

西光斬られ

小松重盛

「教訓」の事

鴛鴦吟

鬼界ヶ島

三

一七

二七

三五

五〇

六〇

七六

八九

俊寛と・やどかり

足 摺

御産繪卷

鳴 弦

那智の小机

新宮十郎

一つの白帆

偽せ義經

鮫 女

大宋水鳥圖式

雁の驚き

天のとりふね

九七

一〇七

一二三

一三三

一四六

一五七

一六七

一七四

一八六

一九五

二〇一

二一〇

江ノ三郎	二二〇
とある森蔭	二三三
燈籠大臣	二四七
みづか夜の門	二五七
蓮花の怪	二六五
假住居	二七九
平大納言時忠	二八八
出た答へ	二九五
啞蟬	三〇三
堅田の湖賊	三一四

御
産
の
巻

おん 猿 樂

都の端づれ鹿ヶ谷しかがやは、東山の一峰、如意岳の山ふところで、加茂川へそぐ白河のみなかみ、樓ノ門瀧も、その谷あひである。

法勝寺の執行しきやう、俊寛しゆんくわん僧都は、鹿ヶ谷に山莊（別宅）をもつてゐた。

裏山を越えれば、近江の三井寺道へつゞき、西北は洛中洛外をひと目に俯瞰ふかんできる。そして、あたりは幽翠だし風致も申し分ないが、おそらく、不便はひと通りであるまい。

もと／＼こゝは、俊寛の祖父、源大納言雅俊まさとしが、隠居所に建てたのを、次に、僧都の父、木寺法印くわんしん寛雅が、歌よみなので、よく歌の會などには、使つてゐたものだつた。——けれど、俊寛は、まだ四十がらみの屈強だし——それに父のやうな風流氣もない。

常の住居は、岡崎の仁王小路にある。

仁王門にやうもん内の大毘盧遮那寺だいびるしゃなじを、法勝寺ともいひ、彼はその寺務執行を勤めてゐた。

地方には寺田八十ヶ所もあり、封戸の雜務やら人事、財政など、忙しい體であつたらしいが、所従の眷族四、五百人の上に立つてゐたといふから、以てその生活ぶりも、へたな公卿や武門以上なものであつたことが分らう。

仁王小路の家には、よき妻も居、息女もある。

(何が、御不足で)

と、人は思ふであらうが、その俊寛にも、なほこの上にも野望があつた。

つねに親しい丹波少將成經や西光法師などの手びきもあり、また、院と寺との關係もあつて、いつか後白河法皇に近づきまゐらせ、法皇からも、なみならぬ眷顧を給はつてゐた。

もう數年來の事である。

とかくして、院中の「反平家窟」の中で、彼も、人いちばい激語を吐く有力な一人になつてゐた。

そればかりではない。

鹿ヶ谷の山莊を、一味の人々の密議場所にあて、風雅の會にことよせては、たび／＼ここに寄りあつた。

こゝは都に近くて、都に遠い。

人目しげき院中とちがひ、どんな人物を加へても、また、密語の洩れる惧れはないので、つひには、後白河法皇も、幾たびとなく、お忍びで渡られた。

中宮滋子の御願で建てた最勝光院は近いので、そこに供人をとゞめ給ひ、あとは箱輿に召されて、山路をお通ひになつた。熱情の餘りとはいへ、ずるぶん大膽な御行動ではあつた。

たとへば。——つい數日前の二十六日。

院の諸門をとち、東門には北面の守りを立たせて、表向き、

（仙洞、御風氣……）

と稱へ、かの武藏坊の自訴も、また、池大納言の院參も、すべての出入にたいして、同様な寂莫を示してゐた日も——何ぞはからん——法皇には、鹿ヶ谷へ微行してをられたのであつた。

この數日の世間では、より／＼に、

『院の山門攻めは、必定であらう』

『明雲座主の身や、山門の逆行爲を、よも、不問には措かれまい』

『御軍勢のお催しは、いつか』

などと、頗りな臆説もあり、法皇御不豫などの噂も交じつて、院と山門との衝突の成りゆきを、どうなる事かと、みな案じてゐた。——さうした微妙この上もない今は時局下なのである。

しかし、法皇の御方寸としては、機微この上もない「時」なればこそ、あへて事を進め、秘密會合にまで臨まれたものであらう。

政略に自負のお強い法皇は、兵略にも、ふかいお考へと自信をもつてゐる。人心の機微を縫ひ、人心が他へ外れてゐるうちに、積年の宿志をお遂けにならうとしたものにちがひない。

こゝに、大和源氏の一族で、多田^{ただ}藏人行綱といふ者がある。

攝津の多田の庄に住んでゐた。

院の執事、新大納言成親は、

『行綱は、人にも忘れられ、世にも遇はず、親は、攝津守であつたにと、つねに不平をもつてゐるさうです。いつかは、あの大和源氏を、御起用あるべきでは御座いますまいか』

と、法皇へ、進言してゐた。

その後、行綱は、ひそかに召され、幾たびか、夜陰に院参したりして、亮中の謀議にあづかつてゐた。他日、事を擧げる日には、攝津の野に、大和源氏を糾合して、まつ先に馳せ参すべし、といふ誓ひのもとに、

『これは、當座の弓袋の代ぞ』

と、成親を経て、お手元の黄金や布、巻絹、皮革などの軍費も拜領してゐた。

けれど、もと／＼大した勢力があるわけでもなく、保元、平治にも戦陣には出ず、餘命を保つて來ただけの男なので、内々、心のうちでは、

『待てよ、平家討伐などといふ畫策が、さう易々と、成就しようか』
多分な危惧をもつてゐた。

さうした彼の觀測では、どう、ひみき目に考へても、今の平家が、仆れるとは思はれない。

たとへ諸州へ、院宣を降されようと、叡山の山法師にすら、輕んぜられる院宣では——と、行綱はこの頃になつては、なほ二の足をふみ、先に下賜された布、巻絹などは、家の子、郎黨共に分けて、直垂ひたれや帷子かたびらに裁ち縫はせ、

『家さへ富めば』

と、口利見主義を選んでしまつた。

すると、成親から密書が來た。

(二十六日、鹿ヶ谷へ——)

との寄合ひ狀である。

行綱はもとより何食はぬ顔してこの會議に臨んだのであつた。かゝる異端な人物がすでに内部に居たとも知らず、平家を仆す密議を計つてゐた人々には、この「二十六日」こそ、まことに宿命的な惡日であつたといふほかはない。

さて。その日、鹿ヶ谷の山莊に集まつた者は、誰々ぞと云へば。

新大納言成親。

近江中將入道淨蓮。

丹波少將成經。

西光法師。

平判官康賴。

故、少納言信西しんぜいの子息靜憲じやうけん法印。

式部大輔正綱。

新平判官資行。

城守基兼。

宗判そうのよぐわん官信房、など。

それに、多田藏人行綱。——また、山莊の主、法勝寺ほうしょうじの僧都俊寛は、いふまでもない。

いや、もうおひと方、重大な存在がある。

後白河法皇。

御座をめぐつて、かう、一味同腹のともがらが、うち揃つたのは稀である。

院中では、しよせん、至難な事だつた。げにや法皇にも、これらの人々を「頼もしげな者共よ」と、みそなはされた事であらう。

所は、鹿ヶ谷、簾や蓐を閉てこめて、聲を密め合ふ氣わづらひもなく、青い峰風は、山莊の廊や間毎を吹きぬけてゆく。

この日、こんな所で、平家顛覆の秘謀が囁かれてゐようとは、洛内數萬戸の屋根も、夢々、氣づく事ではなかつた。

終日の凝議のすゑ、

『——事を舉げるは、今ぞ』

『今を措いてはあるまい』

といふ意見が、中核をなした。それに伴ふ、院宣の主旨、軍兵の糾合、編成、作戰など、灯ともし頃まで、各々が意見をのべたり、検討したり、倦み飽かぬ氣色であつた。

法皇のかゝる思し召は、根ぶかく、年久しいものである。が、かくも急速に決せられたのはな

ぜか。いふまでもなく、今ならば、軍勢をかり催しても、平家方では「院の山門攻めよ」として怪しみもせず、見過ごすにちがひない。——といふ時局と世情と、また敵方の油斷とを巧みに織り入れた御機略なのであつた。

やがて、主の俊寛は、頃を見て、

『山莊のことです。何の調ひもありませんが、粗餐でも』

と、密議の終つた機に、座景を變へた。

けふばかりは誰も、我れを忘れて、討議に熱したあとなので、高坏たかつきや折敷をしきを前にすゑられると、俄に、空腹を思ひ出したものらしい。

そのせゐもあつたらうか、杯の数もかさねないうちに、もう、したゝかな酔ひを顔に發してゐる者が多かつた。

法皇にも、數獻をおすごしになり、龍顔をあざらかに、涼夜りやうやの嵐氣と灯影の明滅に弄あそらせ給うで、しきりに、左右の臣と、おん睦みであつた。

自然、一同も、興に乗じ、霸氣を昂ぶらせて、

『平家々々と、恐れるが、小松の内府（重盛）は、近年、病ひがちだし、入道相國は、福原にのみ居て、とんと一門の内政さへ怠りがちといふ。……そのほかでは、經盛、宗盛など、人物は、格段に落ちるし、公達輩とて、みな華奢風流の眞似びには賢げでも、これはと、優れてみゆる武將もをらん。——まづ六波羅を焼き、西八條を陥し、北面の武者に、大和源氏の兵をあはせ、數日待てば、諸州のお味方が、續々、院へ馳せ參ずるはあきらかな事』

と、四隣への氣がねもなく、大言し合つた。

成親も、それに、氣勢を添へて云つた。

『いま、初めて打ち明けるが、もし、院宣な發せられて、都の内に、六波羅攻めの火を見なば、まづ先に、御門へ馳せ參ぜむといふ有力な武門もある。——老體の者ゆゑ、そして、子弟や一族は、檢非違使の要路や地方の守を勤めてゐるので、わざとこの席には、召されてをらぬが』

『え。それは、たれですか』

人々は、眼や、きゝ耳を揃へて、成親を見た。

『いや、その者の望みと、固い約束によつて、今は云へぬが、平家討滅の御旗が、仙洞にひるがへる日には分る』

『洛内に住む武門ですか』